

天台智顓における三惑について

青 木 隆

天台智顓の教学は、彼以前に存在した仏教思想を集大成して成立したものである。よって智顓の思想を理解するために、彼がどのように先師達、或いは同時代の諸師達の思想を摂取したかを知らねばならない。即ち天台教義形成の過程が問題となる。この問題の解明には、智顓の思想と古三論、地論宗、撰論宗等の諸師達の思想との比較が必要となるであろう。同問題に属するものとして、四土説形成に際して地論宗の思想が大きく取り込まれていることは既に論じた^①。本稿では同じ問題意識に立ち、智顓の煩惱論の形成について考えてみたい。但し煩惱論全体について述べることは困難であるから、論点を三惑にしばらくすることにする。

智顓の煩惱論は晩年に至り、三惑によって破せられるところの三惑としてまとめられた。三惑とは從仮入空観によって破せられる見思の惑、從空入仮観によって破せられる塵沙無知の惑、中道第一義観によって破せられる無明の惑である^②。見思の惑とは具さにはアビダルマが説く九十八使であり、見

諦道及び思惟道で断ぜられる惑である。見諦道、思惟道は『阿毘曇心論』の訳語であり、一般的には見道、修道と漢訳されることが多く、『雜阿毘曇心論』や『阿毘曇心論經』でも見道、修道の訳語が用いられているが、智顓が特に見思の語を用いる背景には、羅什訳『大智度論』もまた見諦道、思惟道の訳語を使っていることが考慮されよう。また見思の惑は『勝鬘經』一乗章が説く四住地の惑と同義とされる。無明もまた無明住地と言われることがしばしばあり、この場合も典拠は『勝鬘經』である。即ち智顓の煩惱論は基本的には『阿毘曇心論』と『勝鬘經』に依っていると見ることが出来る。しかしここで問題となるのは塵沙無知の惑の典拠である。智顓の言説の中で、それについて明確に述べているものは見出し得ない。仮にこれを智顓の独創としても、ではそれはどこから発想されたかが問題となる。

智顓の前期の著作では、塵沙は『六妙法門』に一か所だけ見出しされる。次の如くである。

二乗之人、四住惑除、名_レ得_二聖果_一、更無_二別法_一。菩薩大士、破_二塵沙無明障_一、尽故、菩提理顯、亦不_二異修_一。

ここで三惑は三観とは無関係に説かれている。三惑が三観に関連して説かれるのは、晩年期の著作を俟たなければならぬのであり、三惑が三観所破の惑として設定される以前に、このように単独で見い出されるということは重要である。つまり三惑は三観所破の惑として、形式的に三つ揃えられたというにとどまるものではないということである。

前期の著作中で塵沙の惑が見い出せるのは右のいか所だけであるが、晩年の三大部や維摩經疏に至って、多出することになる。しかしそれらの中で塵沙無知惑の具体的な内容について詳述されることはなく、煩惱対治について最も詳しく説かれている『摩訶止観』中の「破法徧」でも、見思の惑と無明の惑については詳しく説かれながら、塵沙の惑についてはほとんど言及されることがない。わずかに「摂法章」の次の言葉が参考になる。

若析体二乗及通菩薩等、(中略)必須_二次第歷劫修行学_三恒沙仏法_一、先破_二塵沙_一。塵沙雖_レ不_レ潤_二生_一、能障_二化道_一。

これより塵沙の惑は菩薩の化他行の障礙になるものであることが知られる。また右には無知の語はないが、恒沙の仏法を学んで塵沙を破すという記述からすれば、無知とは恒沙の法に無知なことを考えられよう。

天台智顓における三惑について(青木)

智顓の言説中からは、右以上の説明は見い出し難い。そこで三大部の諸注釈⁷⁾や、『論義二百題』中の「塵沙証拠」なる論題を見ると、つまるところ塵沙の惑は恒沙の惑と等しく、それは『勝鬘經』及び『大乘起信論』に出てくるということになっている。智顓が参照していたか否かが問題になる『起信論』はしばらく置いて、『勝鬘經』には確かに「恒沙に等しき数の上煩惱」が、四住及び無明と共に出てくる。よって三惑は『勝鬘經』の所説より抽出されたとする伝統説は、一応うなずける面もあり、特に既に引用した『六妙法門』の文などは、「四住、塵沙、無明」と並べている点で、それを裏づけるものと言えるかもしれない。しかし何故に、語義的には数多いという意味しか持たないであろう塵沙、或いは恒沙の惑が無知の惑と言われるのかについては、『勝鬘經』の所説からは説明し難い。つまり『勝鬘經』の所説から直ちに智顓の三惑に至るには、その間にある種の飛躍が避けられないように思う。

また一方、無知については、典拠として『雜阿毘曇心論』が説く不染汚無知をあげる説がある。たとえば『望月辞典』塵沙の項では、「即ち俗諦の事智を障へ、菩薩の化道をして自在ならざらしむる無数の不染汚無知を云ふ。」と言う。これもやはり三大部の諸注釈等の説を受けたものであるうが、智顓自身がその著作中で不染汚無知について言及していると

ころがない以上、塵沙無知と不染汚無知を直接結びつけることは唐突の観がまぬがれない。

ところがそれらの間隙を埋めるかの如くに、次のような淨影寺慧遠の所説が存在する。『大乘義章』卷五本のものである。

言^二五住^一者、如^二勝鬘經說^一。一見一处住地、二欲愛住地、三色愛住地、四有愛住地、五無明住地。名字如是。体狀如何。（中略）三界無明、名^二無明地^一。無明之中義、復有^二一^一。一者染汚、二不染汚。迷理無明、名^二為^一染汚。事中無知、名^二不染汚^一。此二合^二為^一無明住地^一。

ここで慧遠は『勝鬘經』に依つて五住を掲げながらも、無明住地に関しては『雜阿毘曇心論』が説く染汚、不染汚の二種無知の説を導入して説を為している。また卷六では次のように言う。

大乘法中、無明有^二一^一。一事中無知、不^レ解^二世法^一。二性結無明、迷^二於理實^一。於^レ中有^二三^一。謂^二龜中細^一。龜者与^二彼四住^一相応。如^二小乘說^一。中者所謂恒沙無明。細者所謂無明住地。此等皆は無明使也。

ここでは事中の無知は世俗諦を了解しないこととなつていて、智顓が言う俗諦を明らかにすることから起る塵沙無知と共通する。またここでは、四住と相応する無明、恒沙の無明、無明住地の三種の無明が説かれているが、事中の無知と

恒沙の無明は別のものとされているようである。また以上の説は慧遠の諸々の經疏において、「如是我聞一時仏在」の仏の字を釈する際にしばしば用いられるものであり、慧遠の書をひもとく者にとって必ず目にする説だと言つてよい。よつてその後世の學者に与えた影響は大きく、たとえば吉藏は『勝鬘寶窟』卷上本で、この慧遠の説をそのまま採用している。また元曉は『起信論疏』卷下において、『起信論』の「過恒沙等上煩惱」という句を釈して次のように言う。

言^二過恒沙等上煩惱^一者、迷^二諸法門^一事中無知。此是所知障所攝也。

さらにそれを受けて、法藏も『大乘起信論義記』卷下本で、ほぼ同様の説を立てている。¹⁰⁾但しここで注意すべきことは、慧遠自身は『大乘起信論義疏』卷下之上では、「過恒沙等上煩惱者枝条末也。」¹¹⁾としか言つておらず、恒沙の煩惱を無知とする元曉や法藏の立場は、むしろ天台に近いものとなっている点である。

以上から私が考えるのは、智顓の言う塵沙の無知もまた、慧遠の事中の無知を直接的、或いは間接的に受けて説かれたものではないかということである。むしろ慧遠の説と智顓の説との間にはいくつかの相違点があり、その一つは、智顓の言う塵沙無知の惑には化道の障礙としての性格が付与されており、「入仮」、或いは「出仮」の思想に濃く色付けられたも

のとして、天台の特徴的な一面を発揮している点である。このような相違点はあるものの、塵沙無知惑の典拠を求める場合は、直ちに『勝鬘經』や『雜阿毘曇心論』に赴くのではなく、慧遠の所説を介在させるべきではなからうか。一般に經論にそのままのものが見い出せず、智顗自身も詳述しないような用語がある場合は、その語は当時、地論宗または摂論宗等で盛んに使われていたもので、それを智顗が採用し、独自の概念を盛り込んでいるということが往々にしてある。たとえば四種縁集の如きがそれであり、智顗は『維摩經文疏』で、四種縁集なる概念を用いて『維摩經』のかんりの部分を

解釈しているが、その縁集説は実は地論宗の伝統説であった。またその中で智顗は、界外の煩惱については地論や攝大乘の方が詳しいとも言っている。そこで塵沙無知の場合にも同様のことが考えられないだろうか。さらに智顗の縁集説の受容を見てみると、智顗は慧遠より後の地論宗南道派に属する何者かの著作、或いは所説を使っていることが知られる。慧遠の活躍していた時代と智顗の時代との間にはそう長い隔たりはないが、一世代の余裕はあろう。よって智顗は慧遠の著作に直接的には依らずとも、慧遠の弟子ぐらゐに相当する地論宗の人々と交流があり、その所説を知っていたと考えられる。そこで本稿で問題にした塵沙無知惑にも同様のことが言えるのではないかと思う。即ち恒沙の惑と無知の惑を一つ

にしたのが智顗自身であるか否かは決め難いにしても、ある程度地論宗内で広く用いられていたそれらの用語を援用して、智顗は三惑を形成したのであろう。

1 拙稿『維摩經文疏』における智顗の四土説について（早稲田大学大学院『文学研究科紀要 別冊第一二集』、昭和六十年一月）。

2 『三觀義』卷上、統藏二一四—二、三八左下。

3 大正二五、二二一上。

4 大正一一、二二〇上。

5 大正四六、五五一上。

6 大正四六、三〇上。

7 証真『法華玄義私記』卷三末（『天台大師全集 法華玄義第二』、四七一頁以下）等。

8 大正四四、五六一下。

9 同、五八三下。

10 大正三七、八上。

11 大正四四、二一八上。

12 同、二七二上。

13 同、一九三中。

14 前掲拙稿参照。

（早稲田大学大学院）